クラシックバレエへの取り組みにより獲得される 心理社会的スキルと目標志向性の関係

黒岩 美友¹⁾ 佐々木 万丈²⁾

KUROIWA Miyu¹ and SASAKI Banjou²: The relationship between psychosocial skills acquired by classical ballet practice and goal orientation. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci.

Abstract: The purpose of the present study was to clarify the psychosocial skills acquired through classical ballet practice, and to examine the relationship between those skills and goal orientation in a classical ballet context. We carried out an investigation using 57 items related to psychosocial skills and 15 items related to goal orientation, prepared specifically for this study. The participants in the survey were 165 learners (mean age 14.38 years) from ballet classrooms all over Japan. Factor analysis identified 5 factors for psychosocial skills acquired by putting an effort into classical ballet practice, and learners with both strong mastery-goal orientation and performance-goal orientation acquired a high level of these skills. In contrast, those with no clear goal orientation acquired a low level of skills. In addition, it was shown that different types of psychosocial skills were acquired according to differences in the types of goal orientation.

Key words : dance, mastery goal orientation, performance-approach goal orientation, performance-avoidance goal orientation

キーワード : ダンス, 熟達目標志向性, 遂行接近目標志向性, 遂行回避目標志向性

I 問題の所在

1. 運動やスポーツ活動と心理社会的能力

運動やスポーツの実践が、心理社会的スキルやライフスキルの獲得・向上に繋がるのかどうかが多くの研究により検討されている(例: 平井ほか, 2012; 渋谷ほか, 2018; 杉山ほか, 2010; 上野・中込, 1998). そしてその多くが、運動やスポーツは心理社会的スキルやライフスキルの獲得・向上に貢献すると指摘している. 一方で、スポーツ自体は青少年の健全なライフスキルの獲得や心身の成長・発展に必ずしも貢献しないという指摘があり(例: Danish, 2002; Goudas et al., 2006; Petitpas, 2001), 肯定的な効果を得るためにはスポーツ活動を適正な教育的過程を含むプログラム

として設計する必要があると考えられている. そして、スポーツ活動に基づくライフスキル・プログラムが考案・実践され、一定の成果が認められている(例: Danish et al., 2005; Fraser-Thomas and Cote, 2009). これらの知見に基づけば、計画的に実施される運動やスポーツの実践は、子どもや青少年の心理社会的スキル及びライフスキルの獲得・向上に肯定的に影響する(Fornieris et al., 2014, pp.261-276)と一般的にいえるようである.

ライフスキルとは、身体的、精神的、社会的健康を増進する上で重要な役割を果たす心理社会的能力の基盤となる個人的・社会的能力のことであり(WHO 編, 1997, p.11), 日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力(WHO 編, 1997, p.12)と定義されている. 一方、スポーツ場に限

1) 松浦かがりバレエアカデミー
〒157-0062 東京都世田谷区南烏山5-32-6

2) 日本女子体育大学体育学部
〒157-8565 東京都世田谷区北烏山8-19-1
連絡先 佐々木万丈

1. Kagari Matsuura Ballet Academy
5-32-6, Minami Karasuyama, Setagaya-ku, Tokyo 157-0062
2. Faculty of Physical Education, Japan Women's College of
Physical Education
8-19-1, Kitakarasuyama, Setagaya-ku, Tokyo 157-8565
Corresponding author bsasaki@jwpcpe.ac.jp

定し、そこで生じる問題や課題に対処するのに必要な個人的・社会的能力については、ライフスキルとは分けて心理社会的スキルと表す場合がある(杉山, 2004, pp.69-70). そして、これらが日常生活に般化した場合にライフスキルになる(渋谷ほか, 2018)と考えられている. また、心理社会的スキルやライフスキルに関連し、相川(2000, pp.12-18)は、社会的スキルは包括的にはライフスキルに含まれ、対人場面で発揮される心理社会的能力及びその能力に基づく一連の行動であると指摘している. 本研究では、以上のような能力やスキルに関する定義及び考え方にに基づき、ダンスに取り組む場面において生じる、問題や課題に対して適正に対処するのに必要な個人的・社会的能力及びそれに基づく一連の行動を、ダンスの心理社会的スキルと表すことにする.

2. ダンスと心理社会的スキル

ここで、ダンスへの取り組みと心理社会的スキルやライフスキルの獲得・向上との関係を検討した研究に着目すると、国外では、地域の伝統的ダンスの実践や創作ダンスを含む運動活動プログラムが、幼児期の子どもや小学生の社会的スキル向上に貢献したことが報告されている(Katz-Zichrony, 2015; Lobo and Winsler, 2006; Masadis et al., 2019). また国内では、高校生や大学生のダンス授業により、社会的スキルの向上や学校生活への適応の促進がみられたことが指摘されている(高山, 2014; 山本・中井, 2012).

これらの知見からは、ダンスへの取り組みによっても、運動やスポーツと同様に心理社会的能力が醸成されるということが指摘できそうであり、ダンスが内包する社会性を培う機能(Katz-Zichrony, 2015)を生かす活動プログラムが設計されれば、心理社会的スキルやライフスキルの獲得に繋がる教育的過程を有するダンス実践が可能になると考えられる.

3. クラシックバレエへの着目

多種多様なダンスのジャンルの1つに、クラシック・バレエ(以下「バレエ」と略す)があげら

れる. バレエは大正期に国内に輸入され、習い事として定着している(海野・小山, 2017). しかし近年は、高度な技術獲得の要求からコンクールの開催数が急増し(海野・小山, 2017)、成績重視・テクニック偏重の指導が身体に対して悪影響を及ぼすと懸念されている(海野ほか, 2012; 鶴沼ほか, 1994). 特に、低年齢の子どもの場合、骨成熟の前にトゥシューズを履かせることで足関節や膝関節を痛めることに繋がる. また、小学生高学年から骨成熟に達した中学・高校生、さらに20歳代のバレエ・ダンサーでは、アキレス腱周囲炎、足関節後方(三角骨)インピンジメント症候群、内反小趾による足関節捻挫などが多発する(蘆田, 2004)と報告されている.

一方、バレエ・ダンサーは、下肢を中心に外傷や障害を抱えていながら、医療機関の受診率が低いことが問題となっている(蘆田, 2006; 横尾ほか, 2003). バレエ・ダンサーの外傷や障害の予防には、自らのトレーニング内容やスケジュール管理などができるようになること(Byhring and Bo, 2002)、また定期的な医療的支援が活用できること(横尾ほか, 2003)、そしてストレスの低減や睡眠不足を避けることと併せて、社会的支援を得るための人間関係づくりができることが重要である(Adam et al., 2004)と考えられている. また、自律訓練法や積極的内容のセルフトーク、ストレスに対応するためのコーピングスキルを身につけることの有効性も指摘されている(Noh et al., 2007). したがって、バレエに取り組む者は、心身の健康管理を自律的に行えるようになること、また日常生活を適正に過ごすための心理的スキルや社会的スキルを身につけることが必要であると考えられる.

また、バレエへの取り組みで心理社会的スキルやライフスキルが身に付くのかどうかを考察することは、バレエに限らず、ダンスの教育的実践の意義を心理学的視座から明らかにする上で重要である.

4. 活動の効果を規定する主体的要因としての達成目標

ところで、心身の発展・成長を目標にプログラム化されたスポーツ実践の成果を一層高めるには、活動に取り組む者の主体的要因への着目も必要である。なかでも、活動の動機づけを高めるために、明確な目標を持つことは重要である。このことはダンスでも同様と考えられる。また、どのような目標を設定するかは、共に活動する仲間や指導者との関り方にも関連し、活動中の対人的な体験や経験の質・量に影響し、心理社会的スキルやライフスキルの獲得・向上に関係することが予想される。

能力に関わる認知が目標の有り方に影響し行動に違いが生じることを説明する理論として達成目標理論がある。その初期には、Nicholls (1984) と Dweck (1986) が能力の認知に関わるそれぞれの論点から独自の目標を提案した。しかし、その内容がほぼ共通であったため、Ames and Archer (1987, 1988) により、学習それ自体の習得を目標とし努力に大きな価値が置かれる熟達目標と、学習自体は手段であり他者との比較によって良い成績を上げることが目標とする遂行目標にまとめられた (櫻井, 2009, p.124)。また、特性変数として捉える (櫻井, 2009, pp.123-124) 場合は目標志向性と呼ばれ、知識の獲得や技術の向上によって能力を伸ばすことやその過程を重視する場合は熟達目標志向性、他者との比較による高い評価や優れた成績を重視する場合は遂行目標志向性などと呼ばれている (外山, 2011, pp.180-181)。一般的に、達成目標は、遂行目標よりも熟達目標の方が動機づけに好ましい影響を与える (伊藤, 2013, p.28) とされ、目標志向性も同様に、遂行目標志向性よりも熟達目標志向性の方が、課題の遂行に対する動機づけの維持・向上に適している (外山, 2011, pp.180-181) と指摘されている。

しかし、その後、遂行目標の適応的な学習とのポジティブな関係が見出されると、研究結果の一貫性のなさが問題視されるようになる (村山, 2003)。これに対し Elliot and Harackiewicz (1996) は、遂行目標を遂行接近目標と遂行回避目標に分

離し、前者を他者と比べてできることを目指す成功接近的な遂行目標、後者を他者と比べてできないことを避ける失敗回避的な遂行目標とする3目標視点を提出した。さらに、Elliot and McGregor (2001) は、有能さの定義 (definition: 個人内的か相対的) と有能さの価 (valence: 正 (positive) か負 (negative)) を「2 × 2」に組み合わせ、有能さの定義が個人内的な熟達目標を、有能さの価が正の熟達接近目標 (以前の自分よりもよくできることを目指す) と、有能さの価が負の熟達回避目標 (以前の自分よりもできないことを避ける) に分類した (村山, 2003)。従来の熟達目標は前者に該当し、後者が新たに熟達目標の枠組みに含められたことになる。しかし、熟達回避目標はその後の研究が進展しておらず (櫻井, 2009, p.127)、一方の遂行目標は2つに分類されたことの有用性が明らかにされている (村山, 2003)。

達成目標に関わる以上のような知見に基づけば、ダンスでも、目標志向性の違いはダンスの能力の認知的過程やそれに基づく行動に影響を及ぼし、その実践中の周囲との関係の築き方や維持・発展のさせ方などにも違いを生じさせると考えられる。そして、目標志向性の違いにより心理社会的スキルやライフスキルの身に付き方にも違いが生じると推測される。

5. 本研究の目的

以上の運動やスポーツの実践と心理社会的能力との関係、そしてダンスを対象とする検討の必要性和意義に基づき、本研究ではバレエに着目し、バレエへの取り組みで獲得されと考えられる心理社会的スキル (以下「バレエの心理社会的スキル」と略す) の構成概念を操作的に明らかにする。次に、バレエへの取り組みにおける目標志向性 (以下「バレエの目標志向性」と略す) の違いが、心理社会的スキルの高さにどのように関係するかを検討する。研究対象は中学生と高校生である。これによりバレエの心理社会的スキルについて、運動やスポーツの同年齢を対象に行われた研究知見との比較が可能になる。また、自記式の質問紙調査のため、調査内容を自ら理解し、考え、回答

できる年齢段階であることが望ましい。

なお、ダンスの目標志向性に着目した研究は、国内外を通じてわずかしみられず(Andrzejewski et al., 2013; de Bruin et al., 2009; Hanrahan et al., 2009; 澤田・杉山, 2011 など), バレエに焦点をあてた研究はみられない。さらに、ダンスの目標志向性の違いと心理社会的スキルの高さの関係に関する検討も行われていない。したがって、本研究からは、バレエのみならずダンスへの取り組みを通じた社会的スキルやライフスキルの獲得・向上に関わる目標のあり方について、有用な情報が得られると考えられる。

II 方 法

1. 予備調査

バレエの心理社会的スキルについて、バレエに取り組む中学生と高校生(以下「バレエ生徒」と表す)及びその保護者の考えに基づき検討するため、自由記述調査を実施した。調査は2016年4月に、関東地区の5つのバレエ教室(任意抽出)に通う65名のバレエ生徒とその保護者を対象に行われた。内容は、基本属性(性別、年齢、バレエ開始年齢など)とバレエから学んだり身に付いたりしたことの自由記述である。ただし、体力、健康、バレエの技術は含めないことを説明した。調査では、無記名のため個人は特定されないこと、回答の有無は調査対象者の自主的な判断で決められることなどの倫理的配慮が口頭または文書で説明された。

回答は、バレエ生徒51名(男子2名、女子49名)と保護者49名から得られた。バレエ生徒の平均年齢は 13.9 ± 1.6 歳、開始年齢の平均は 4.7 ± 1.5 歳、平均継続年数は 9.3 ± 2.1 年、1週間の平均レッスン回数は 4 ± 1.8 回、1回の平均練習時間は 2 ± 1.8 時間、コンクール参加経験者は38名(74.5%)、コンクール参加の平均回数は 3.8 ± 5.2 回であった。保護者は全員女性で平均年齢は45.7±3.6歳であった。

収集された心理社会的スキルの記述は、バレエ生徒が139記述、保護者が129記述であり、こ

れらは、KJ法のデータ単一化とグループ編成法を援用し、内容別にまとめられた。一連の作業は本研究者と共同研究者(スポーツ心理学を専攻する大学教員:第2著者)並びにスポーツ心理学を専攻する大学院生の合計3名の協議により行われた。1つのカテゴリーは2つ以上の同一内容の記述で構成されることを条件とした。分類の結果、バレエ生徒からは27個、保護者からは19個のカテゴリーが生成された。さらに、両者に共通のカテゴリーと単独のカテゴリーに分類した結果、自律的行動、努力、主張などの19のカテゴリーが生成された。これらをもとに、可能な限り自由記述の原文を用い、各カテゴリーに3項目、全体で57項目の本調査用質問紙が作成された。

2. 本調査

2.1 調査時期

調査は、2016年6月中旬から9月上旬にかけて実施された。

2.2 調査対象者

バレエ生徒が在籍する全国のクラシックバレエ教室(予備調査協力教室は除外)から任意に22教室を選び、研究への協力が得られた16教室(宮城1, 群馬2, 千葉2, 東京6, 神奈川1, 新潟2, 山梨1, 鹿児島1)に、全体で238部の調査用質問紙が送付された。

2.3 調査内容

2.3.1 基本属性

調査対象者の属性把握のため、性別、年齢、中学校・高校の別、学年、バレエの開始年齢などの回答を求めた。

2.3.2 バレエへの取り組みにおける目標志向性を測定するための項目

項目内容は、達成目標を時間軸上の未来に位置づけるDweck(1986)のモデル(速水ほか, 1989)に従った。さらに3目標視点(Elliot and McGregor, 2001)に基づき、熟達目標志向性が5項目、遂行目標志向性の成功接近的な項目が5項

目、同じく失敗回避的な項目が5項目の全体15項目を作成した(項目例は表1参照)。教示文は「クラシックバレエのレッスンにはどのように取り組んでいますか」であり、回答は5件法で「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」に5—1点を与えた。

2.3.3 バレエの心理社会的スキル測定項目

19 カテゴリー・57 項目(項目例は表2参照)の本調査用質問紙を実施した。「クラシックバレエに取り組むことによって自分に身に付いたこととして以下に示す内容はどの程度あてはまりますか」を教示文とし、回答は5件法で「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」に5—1点を与えた。

2.3.4 達成動機尺度

スポーツ経験から獲得されるライフスキルの内容や獲得の程度は、スポーツ活動への関わり方や活動の水準により異なる(杉山, 2004, p.76; 上野, 2001)。したがって、バレエ生徒の特性的な達成動機の違いは、バレエの目標志向性と心理社会的スキルの獲得状況に関係すると考えられる。そこで、バレエの目標志向性及び心理社会的スキルと達成動機の間を検討するため、達成動機尺度(堀野・森, 1991)を実施した(項目例は表3参照)。本尺度は2下位尺度構成(自己充實的達成動機・競争的達成動機)で、内的一貫性と妥当性が認められている。達成動機に関わる項目内容が自分にどの程度あてはまるのかを尋ね、7件法により「非常によくあてはまる」から「全然あてはまらない」に7—1点を与えた。

2.3.5 自己肯定意識尺度

自己意識は個人の行動を規定する内的な準拠枠である(平石, 1990)。したがって、自己意識の高低はバレエの目標志向性に影響し、結果として獲得される心理社会的スキルの内容にも関連すると考えられる。そこで、一般的な自己意識とバレエの目標志向性並びに心理社会的スキルとの間を検討するため、自己肯定意識尺度(平石,

1990)を実施した。この尺度は、対自己と対他者の2領域の自己意識を捉えることができる。本研究では、バレエへの取り組みと自己意識の間を考察するため、対自己領域に着目し、自己受容と自己実現的態度の2下位尺度を実施した(項目例は表3参照)。妥当性は検証されていないが、内的一貫性は確認されている(平石, 1993)。項目の内容が現在の自分にどのくらいあてはまるのかを尋ね、5件法により「あてはまる」から「あてはまらない」に5—1点を与えた。

2.4 倫理的配慮

調査は、個人が特定されないように無記名で行われること、回答は調査対象者の自主的な判断でいつでも中止できること、回収データは記号化されデジタルデータとして厳重に管理されることなどが文書によって説明された。

2.5 分析

統計分析は、IBM SPSS Statistics Ver.22.0 及び IBM SPSS Amos Ver.22.0 を用いて行われた。検定の有意水準は5%とした。

2.5.1 バレエの目標志向性と心理社会的スキルの構成概念の検討

バレエの目標志向性と心理社会的スキルの構成概念を検討するため、探索的因子分析(最尤法・初期固有値1以上の因子をプロマックス回転)を実施した。さらに、因子のデータに対する適合度を検証するため、確認的因子分析を行った。適合度の指標には、GFI (Goodness of Fit Index : 0.90 以上もしくは 0.95 以上が良好)、CFI (Comparative Fit Index : 0.90 以上もしくは 0.95 以上が良好)、RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation : 0.05 以下が良好, 0.05—0.1 未満が許容範囲)を用いた(朝野ほか, 2005, pp.120-122)。加えて、抽出された因子を構成する項目の内的一貫性を確かめるために α 係数を求めた。

2.5.2 基準関連妥当性の検討

操作的に求められたバレエの目標志向性と心理

社会的スキルの構成概念について、それぞれの基準関連妥当性を検証するために、因子の構成項目群の合計点を項目数で除した値を算出し、達成動機尺度並びに自己肯定意識尺度の各下位尺度との間の相関係数を求めた。

2.5.3 目標志向性と達成動機、自己肯定意識、及び心理社会的スキルの関係に関する検討

バレエ生徒を目標志向性のタイプ別に分類し、達成動機、自己肯定意識、及び心理社会的スキルの高低をタイプ別に比較（一元配置分散分析）した。効果量の確認を η^2 により行い、大きさの目安を、.01（小）、.06（中）、.14（大）とした（高波，2012，p.66）。多重比較はボンフェローニの方法を用いた。

III 結 果

1. 分析対象者の属性

回答は165名から回収され（回収率69.3%），男子2名，女子163名，中学生110名（1年39名・2年35名・3年36名），高校生55名（1年21名・2年16名・3年18名）であった。また，平均年齢は 14.4 ± 1.7 歳（範囲：12—18），平均開始年齢は 4.9 ± 1.9 歳（範囲：2—13），平均継続年数は 9.5 ± 2.6 年（範囲：1—15）であった。継続理由は「踊ることが好きだから」が139名（84.2%），「将来のため」が13名（7.9%），「健康のため」が3名（1.8%），「なんとなく」が3名（1.8%）であった。「その他」が6名（3.6%）で，「もっと上手になりたいから」「舞台に立つのが好きだから」などがみられた。1名が無回答であった。

1週間の平均練習回数は 3.4 ± 1.5 回，1回の平均練習時間は 2.4 ± 1.1 時間であった。また，自主練習は「よくする」が60名（36.4%），「ときどきする」が45名（27.3%），「たまにする」が40名（24.2%），「ほとんどしない」が19名（11.5%），無回答が1名であった。さらに，その時間は30分未満が90名（54.5%），0.5—1時間未満が38名（23.0%），1—2時間未満が12名（7.3%），2時間以上が5名（3%）であった。コンクール参

加経験者は96名（58.2%：その内の受賞経験者61名），未経験が69名であった。

なお，165名中，男子が2名のみで性別に大きな偏りがあった。しかし，男女により値が大きく異なる属性はみられず，また，目標志向性と心理社会的スキルの1項目ずつの平均を男女で比較したが（*t*検定），全項目で有意差はみられなかった。以上により男子2名のデータも分析対象に含めることにした。

2. バレエの目標志向性と心理社会的スキルの構成概念

2.1 バレエの目標志向性の因子構造

各項目の記述統計を求め，歪度の絶対値が1以上の場合は回答に強い偏りがあると判断し分析から除外した。1項目が該当し，これを除く14項目による因子分析の結果，因子負荷量の絶対値が.40未満の3項目が認められた。これらを除き再度因子分析を行った結果，11項目・3因子（表1）が抽出された。固有値の範囲は3.28—1.19であった。また，因子間相関は，第1・第2因子が.31，第1・第3因子が.10，第2・第3因子が.48であった。

次に，3因子のデータへの適合度を確認的因子分析により検証した結果，GFIが.918，CFIが.912，RMSEAが.073であった。いずれも，データへのあてはまりが良好もしくは許容範囲を示す水準であった。また，各因子の構成項目の α 係数は，.68—.72の範囲であった。 α 係数は.70が一般的な下限（Miller et al., 2011, p.170）とされる。第3因子の値が.68であったが，.70に近いことから，各因子の内的一貫性は許容範囲にあると判断した。各因子は項目内容から，第1因子を「熟達目標志向」の因子（以下「熟達志向」と略す），第2因子を「遂行接近目標志向」の因子（以下「遂行接近志向」と略す），第3因子を「遂行回避目標志向」の因子と解釈した（以下「遂行回避志向」と略す）。

2.2 バレエの目標志向性因子の基準関連妥当性

バレエの目標志向性3因子の各構成項目群と達

表1 目標志向性の因子分析結果並びに α 係数

項目	因子1	因子2	因子3	α 係数
13 新しい振り付やテクニックは自分で色々工夫しながら練習する	.77	-.08	.03	
10 テクニックや振り付けは言われたことを直すだけでなく自分なりに良くする	.77	-.06	.08	.71
7 自分の課題は自分で見つけて直すようにする	.49	.08	.11	
1 難しそうな振り付けにも諦めずに取り組む	.43	.29	-.29	
5 クラスの中で一番上手に踊れるように取り組む	-.02	.76	.02	
2 新しいテクニックはできる限り早く身につけ仲間や先生にほめられるようにする	-.03	.76	-.16	.72
11 ビルエットやジャンプなどのテクニックは誰よりも目立つようにする	.07	.46	.31	
12 レッスン中に気にしていることは、どうすれば自分が下手だと思われないようにするかだ	-.08	-.09	.74	
3 レッスンではどちらかと言えば自分ができそうな振り付けやテクニックを練習したい	.13	-.11	.56	.68
6 周りの仲間が自分よりも上手な場合は、自分が下手だと思われないようにする	-.03	.37	.43	
9 レッスンでは仲間がどのくらいできているのかを気にしながら練習する	.03	.28	.43	
<hr/>				
	固有値	3.28	2.03	1.19
	固有値寄与率	29.86	18.42	10.78
<hr/>				
	相関係数	因子1	.31	.10
		因子2		.48

成動機尺度及び自己肯定意識尺度との相関分析を行った。なお、達成動機尺度と自己肯定意識尺度の分析対象者のデータに基づく α 係数はいずれも.70以上であり(表3参照)、内的一貫性は必要な水準を満たしていた。

分析の結果(表3)、一部の尺度間で有意な相関がみられなかった。しかし、達成動機尺度と目標志向性との間には.33—.53、自己肯定意識尺度との間では.22—.41の有意な相関係数が複数みられた。達成動機尺度の自己充実的達成動機は個人的な側面、競争的達成動機は社会的な側面での価値のあることを成し遂げたいという動機である(堀野, 1987)。特に、前者には「人に勝つことより自分なりに一生懸命やるのが大事だ」などの項目が含まれている。このことからすれば、遂行回避志向との間にはほとんど相関がみられず、熟達志向とはやや強い、遂行接近志向とは弱い有意な正の相関がみられることは妥当といえる。また、自分を肯定的に受け止め、自己実現に向けて積極的に取り組むことの自覚の強さを表す自己肯定意識が、遂行回避志向との間にはほとんど相関がなく、熟達志向と遂行接近志向との間に正方向の有意な相関関係がみられることは十分に考えられる結果である。以上により、バレエの目標志向性を説明する3因子は基準関連妥当性を満たしていると考えられる。

以後は、3因子を構成する各項目群を下位尺度とし、その合計点を項目数で除して求めた1項目当たりの平均値を用いて分析と考察を行う。なお、各下位尺度の得点の高さは、各目標志向性の傾向の高さを表す。

2.3 バレエの心理社会的スキルの因子構造

57項目の記述統計を求め、歪度の絶対値が1以上の場合は回答に強い偏りがあると判断し分析から除外した。その結果21項目が除外され、36項目による因子分析が行われた。因子負荷量の絶対値が.40未満の項目や複数の因子に.40以上の値を示す項目を除きながら繰り返し分析を行った結果、6回目の分析で18項目・5因子(表2)が抽出された。固有値は6.4—1.0の範囲であった。また、5因子相互の相関係数は.21—.61の範囲を示した。

次に5因子のデータへの適合度を確認的因子分析により検証した結果、GFIが.938、CFIが.948、RMSEAが.055であった。したがって、因子のデータに対するあてはまりは、良好もしくは許容範囲にあると考えられた。また、構成項目の内的一貫性を確認するために求めた α 係数は、.68—.89の範囲を示した。第5因子が.68であったが、.70に近い値であることから、各因子を構成する項目の内的一貫性は必要な水準を満たして

表2 心理社会的スキルの因子分析結果並びに α 係数

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	α 係数
57 計画的に練習を進める	.96	-.02	-.08	.30	-.05	
50 規則正しい生活を心がける	.63	-.11	-.10	.09	.07	
26 自分の行動には厳しく向き合う	.56	-.14	.13	-.01	.21	.82
54 練習時間が長くなっても集中力を切らさない	.55	.10	.21	-.03	.02	
46 どのような状況でも自分を見失わないようにする	.50	-.01	.22	.25	-.24	
39 親や仲間に頼らないで行動する	.44	.19	-.04	.13	-.02	
55 仲間には負けないという気持ちで取り組む	.10	.91	-.04	.07	-.10	
17 誰かを意識し競い合いながら自分の力を引き出すようにする	-.14	.89	.02	.05	.01	.89
36 仲間と共に競争し高め合う	-.05	.79	.02	-.04	.16	
5 目標に向かって地道に努力する	-.13	-.02	.89	.00	-.13	
43 あきらめずにコツコツと努力する	.14	.05	.73	-.04	.01	.81
28 難しいことも逃げずに取り組む	.12	-.04	.61	.07	.17	
51 人前でも自分の意見を堂々と話す	.22	.14	-.09	.72	-.07	
13 分からなければ分かりませんとはっきり言う	-.20	-.02	-.02	.69	.04	.75
8 人前に出ても緊張しないようにする	-.18	-.09	.14	.63	.02	
32 自分の思っていることをきちんと相手に伝える	.31	-.07	-.11	.56	.08	
15 仲間と協力して練習に取り組む	.00	.00	.01	.05	.87	.68
53 仲間と励まし合いながら練習する	.09	.16	.05	-.03	.45	
固有値	6.40	2.14	1.83	1.37	1.01	
固有値寄与率	31.99	10.70	9.16	6.83	5.07	
相関係数 因子1		.33	.61	.47	.44	
因子2			.30	.21	.40	
因子3				.30	.45	
因子4					.34	

いると判断した。各因子は項目内容から、第1因子を自律的行動スキル、第2因子を競争的成長スキル、第3因子を忍耐・挑戦スキル、第4因子を積極的主張スキル、第5因子を協調スキルと解釈した。

2.4 バレエの心理社会的スキル因子の基準関連妥当性

5因子の構成項目群と達成動機尺度及び自己肯定意識尺度との相関分析を行った。その結果（表3）、一部の尺度間で有意な相関がみられなかったが、達成動機尺度と心理社会的スキルの間では.20—.62の、また自己肯定意識尺度との間では.21—.61の有意な相関係数が示された。特に、自己充実的達成動機と自律的行動スキル（ $r = .60$ ）及び忍耐・挑戦スキル（ $r = .62$ ）、競争的達成動機と競争的成長スキル（ $r = .56$ ）、自己実現的態度と自律的行動スキル（ $r = .52$ ）並びに忍耐・挑戦スキル（ $r = .61$ ）は、比較的強い相関係数

を示した。いずれも達成動機の高さ並びに自己肯定意識の高さと心理社会的スキルの高さとの間に、正方向の比例関係が示された。5因子がバレエに対する肯定的で積極的な行動や態度を示していることと捉えられることから、自分にとって価値のある課題を達成したいという動機の高さ、そして様々な課題に対する適応的な行動の内的基準となる自己意識の高さとの間に、正方向の比例関係がみられることは妥当といえる。したがって、バレエの心理社会的スキルを説明する5因子は基準関連妥当性を満たしているといえる。

以後は5因子を構成する各項目群を下位尺度とし、その合計点を項目数で除して求めた1項目当たりの平均値を用いて分析と考察を行うことにする。なお、各下位尺度の得点の高さは、各スキルが身につけている程度（以下「獲得レベル」と表す）を表す。

表3 達成動機、自己肯定意識、心理社会的スキル、および目標志向性の相関 ($n=165$)

変数	心理社会的スキル					目標志向性		
	自律的行動	競争的成長	忍耐・挑戦	積極的主張	協調	熟達志向	遂行接近志向	遂行回避志向
達成動機								
自己充実の達成動機	.60**	.25**	.62**	.45**	.42**	.49**	.33*	.04
競争的達成動機	.30**	.56**	.20*	.14	.24**	.14	.53**	.52**
自己肯定意識								
自己受容	.43**	.14	.37**	.39**	.21**	.32**	.22**	.02
自己実現の態度	.52**	.32**	.61**	.33**	.30**	.41**	.39**	.04

* $p<.05$ ** $p<.01$

† 各下位尺度の本研究分析対象者のデータに基づく α 係数及び項目例は次の通りである。自己充実の達成動機 ($\alpha=.87$): 人に勝つことより自分なりに一生懸命やることが大事だと思う, いろいろなことを学んで自分を深めたい, など 13 項目。競争的達成動機 ($\alpha=.88$): 他人と競争して勝つとうれしい, どうしても私は人より優れていたいと思う, など 10 項目。自己受容 ($\alpha=.77$): 自分なりの個性を大切にしている, 自分の良いところも悪いところもあるままに認めることができる, など 4 項目。自己実現の態度 ($\alpha=.85$): 自分の夢をかなえようと意欲に燃えている, 自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている, など 7 項目。

3. バレエ生徒の目標志向性と心理社会的スキル

3.1 目標志向性のタイプ別人数

目標志向性のタイプ別に達成動機, 自己肯定意識, 及び心理社会的スキルの特徴を検討するために, バレエ生徒を分類した。分類は目標志向性の分析対象者全体の平均点 (熟達志向: 4.20 点, 遂行接近志向: 3.52 点, 遂行回避志向: 3.02 点) を基準に, 平均点以上を高群, 平均点未満を低群とした^{注1)}。また, 遂行目標志向性が 2 つに区分されるため, 理論上は 8 つのタイプに分類された (表 4 参照)。その結果, 各タイプは I が 56 名, II が 22 名, IV が 11 名, V が 33 名, VI が 36 名, VIII が 7 名であった。タイプ III と VII は該当者がいなかった^{注2)} (表 4)。

3.2 目標志向性のタイプ別比較①: 達成動機および自己肯定意識

タイプ別に達成動機尺度と自己肯定意識尺度の各下位尺度得点を比較した結果, 全下位尺度得点の F 値が有意であり, タイプ別に差がみられた (表 4)。自己充実の達成動機の効果量は大きく, 多重比較ではタイプ I, II, IV, VIII がタイプ VI よりも有意に得点が高く, またタイプ I がタイプ V よりも有意に高い得点を示した。競争的達成動機は効果量が大きく, 多重比較ではタイプ I と V の得点がタイプ II と IV よりも有意に高かった。自己受容の効果量は中程度であり, 多重比較では

タイプ I の得点がタイプ VI よりも有意に高かった。自己実現の態度は効果量が大きく, 多重比較ではタイプ I, II, IV, V, VIII がタイプ VI よりも得点が有意に高く, また, タイプ I はタイプ II と V よりも有意に高い得点を示した。

3.3 目標志向性のタイプ別比較②: 心理社会的スキル

タイプ別に心理社会的スキルの各下位尺度得点を比較した結果, 全スキルにおいて F 値が有意であり, タイプ別に差がみられた (表 4)。自律的行動スキルは効果量が大きく, 多重比較ではタイプ I, II, IV, VIII がタイプ VI よりも有意に高い得点を示し, さらにタイプ I の得点がタイプ V よりも有意に高かった。競争的成長スキルは効果量が大きく, 多重比較ではタイプ I がタイプ II, IV, VI よりも有意に高い得点を示した。またタイプ V の得点がタイプ II と VI よりも有意に高かった。忍耐・挑戦スキルは効果量が大きく, 多重比較ではタイプ I, II, IV, VIII がタイプ VI よりも有意に高い得点を示した。またタイプ I の得点がタイプ V よりも有意に高かった。積極的主張スキルは効果量が中程度であり, 多重比較ではタイプ I の得点がタイプ VI よりも有意に高かった。協調スキルは効果量が大きく, 多重比較ではタイプ I の得点がタイプ IV と VI よりも有意に高かった。

表4 達成動機、自己肯定意識、および心理社会的スキルの目標志向性タイプ別比較（一元配置分散分析）

変数	タイプ：平均±SD (n)							F	η ²	多重比較 (Bonferroni)
	I	II	IV	V	VI	VIII				
達成動機										
自己充實的達成動機	6.19 ± .54 (53)	5.78 ± .77 (21)	5.89 ± .70 (10)	5.46 ± .83 (31)	5.16 ± .58 (35)	6.00 ± .78 (7)	11.61**	.28	I, II, IV, VIII>VI	I>V
競争的達成動機	5.25 ± .98 (56)	4.08 ± 1.12 (22)	4.48 ± .98 (11)	5.01 ± .93 (33)	4.13 ± 1.03 (33)	4.46 ± .67 (7)	8.28**	.21	I,V>II,VI	
自己肯定意識										
自己受容	4.48 ± .47 (56)	4.06 ± .64 (22)	4.20 ± .71 (11)	4.06 ± .79 (33)	3.87 ± .72 (36)	4.46 ± .60 (7)	4.71**	.13	I>VI	
自己実現の態度	4.40 ± .46 (55)	3.90 ± .76 (22)	4.43 ± .55 (11)	3.94 ± .72 (33)	3.31 ± .82 (36)	4.29 ± .51 (7)	13.22**	.29	I, II, IV,V, VIII>VI	I>II,V
パレエの心理社会的スキル										
自律的行動スキル	4.18 ± .55 (56)	3.82 ± .57 (22)	4.00 ± .71 (11)	3.55 ± .65 (33)	3.34 ± .51 (36)	4.17 ± .47 (7)	11.63**	.27	I, II, IV, VIII>VI	I>V
競争的成長スキル	4.31 ± .65 (56)	3.09 ± 1.03 (22)	3.24 ± .58 (11)	3.91 ± .80 (33)	3.06 ± .91 (36)	3.57 ± .81 (7)	14.81**	.32	I>II, IV,VI	V>II,VI
忍耐・挑戦スキル	4.58 ± .46 (56)	4.36 ± .62 (22)	4.58 ± .42 (11)	4.15 ± .72 (33)	3.79 ± .62 (36)	4.57 ± .37 (7)	9.69**	.23	I, II, IV, VIII>VI	I>V
積極的主張スキル	3.87 ± .86 (56)	3.58 ± .86 (22)	3.55 ± .99 (11)	3.44 ± .75 (33)	3.33 ± .73 (36)	4.14 ± .76 (7)	2.86*	.08	I>VI	
協調スキル	4.56 ± .58 (56)	4.25 ± .61 (22)	3.73 ± .90 (11)	4.35 ± .67 (33)	3.92 ± .68 (36)	4.29 ± .64 (7)	5.99**	.16	I>IV,VI	

* $p<.05$ ** $p<.01$

† タイプの内訳は次の通り。タイプI [熟達志向 (高); 遂行回避志向 (高)]; タイプII [熟達志向 (高); 遂行接近志向 (低)]; タイプIII [熟達志向 (高); 遂行回避志向 (高)]; タイプIV [熟達志向 (高); 遂行接近志向 (低)]; タイプV [熟達志向 (高); 遂行回避志向 (高)]; タイプVI [熟達志向 (低); 遂行回避志向 (低)]; タイプVII [熟達志向 (低); 遂行接近志向 (高)]; タイプVIII [熟達志向 (低); 遂行接近志向 (低)]; タイプIX [熟達志向 (高); 遂行回避志向 (高)]。

IV 考 察

1. 分析対象者の活動状況

分析対象者は女子 163 名、男子 2 名 (1.2%) であった。国内のバレエに取り組む男子生徒全体の割合は 2.2% (海野ほか, 2012) と推定されている。このことからすれば、本研究の男女比は母集団に近いと考えられる。次に、開始年齢の平均は 4.9 歳であり、その継続年数は 9.5 年と長期に及んでいる。また、その理由は 8 割が踊ることへの愛着である。また自主練習も、時間の長短の違いはあるが全体の 9 割が実施している。さらに、コンクール参加者は半数を超え (58.2%)、全国調査の参加率 (63.1% : 海野・小山, 2017) と比べても大きく異なるものではなかった。

以上をまとめると、調査対象者は標本集団としては小規模であるが、国内全体のバレエに取り組む生徒の特徴をある程度反映していると考えられる。

2. バレエの目標志向性

抽出された 3 因子は、項目作成で準拠した熟達目標志向性と、2 区分の遂行目標志向性 (成功接近的・失敗回避的) の内容を反映している。したがって、バレエへの取り組みでも、練習そのものに関心を持ち熟達することを目標とする場合と、他者との比較による自らの能力の位置づけに関心を持ち、うまくできそうな場合には自分の能力の高さをみせようとする目標を持ち、逆にうまくできそうにない場合は能力が低いと思われまいようにする目標を持つ場合の、3 つの目標傾向があると考えられる。このような達成目標のあり方は学習以外のことにも適用できる (外山, 2011, p.179) と指摘されている。本研究結果により、バレエの実践場面にも適用が可能であることが示されたといえる。

3. バレエの心理社会的スキル

抽出されたバレエの心理社会的スキル 5 因子を、運動やスポーツの実践に関わる心理社会的ス

キルと比較した場合、自律的行動スキルは体育授業場面の問題解決スキル (杉山ほか, 2010) や運動部活動場面の集中力 (渋谷ほか, 2018) などと共通している。また、忍耐・挑戦スキル、積極的主張スキル、及び協調スキルも、運動部活動に関わり指摘された心理社会的スキル (渋谷ほか, 2018 ; 上野・中込, 1998) や一般的な社会的スキル (相川, 2000, pp.46-78) の内容と共通している。これらの結果から、運動やスポーツへの取り組みと同様の心理社会的スキルが、バレエへの取り組みにおいても身につくと考えられる。

このような中、競争的成長スキルに関しては、スポーツ活動を対象とするこれまでの探索的研究では、同様のスキルは見出されていない。単に負けまいと競うのではなく、競い合いながら共に向上を目指すということには、バレエに取り組むことの特徴が反映されているのではないかと考えられる。すなわち、バレエ生徒においては、観客にみられるあるいは注目されるということを認識しながらテクニックやパフォーマンスを高めることが行われていると推測される。さらに、群舞などでは、ダンサー同士が動きをそろえる必要があり、仲間に劣らないようにする、あるいは自分だけ下手だと思われまいようにするなどの意識も働いていると考えられる。加えて、レッスンはバレエ教室で行われるため、学校の教室や部活動などとは異なる規範や人間関係のあり方などが存在することも想定される。このようなバレエの特性や環境的要因が、それに応じた、あるいは応じるために必要な心理社会的スキルを醸成させると推察される。

なお、すでに指摘の通り、抽出された 5 因子は、統計的にはデータへの適合度が良好であり、項目の内的一貫性と基準関連妥当性を概ね満たしている。また、項目作成ではバレエ生徒とその保護者への調査に基づく記述内容が使用され、さらに上述のように心理社会的スキルとして獲得されることが十分に考えられる内容が示されている。以上を総括すれば、5 因子は内容的に妥当であり、構成概念妥当性を有していると考えられる。

4. バレエの目標志向性と達成動機及び自己肯定意識の関係

達成動機と自己肯定意識の各2下位尺度の得点を目標志向性のタイプ別に比較した。その結果、全ての目標志向性が高いタイプIにおいて、各下位尺度の得点が高いことが示された。一方、全体的に得点が低かったのは、全ての目標志向性が低いタイプVIであった。特に、自己充實的達成動機と自己実現的態度は、他のほぼ全てのタイプよりも得点が有意に低い。タイプVIの両下位尺度の平均点は、5.16点（7件法・中間点は4点）と3.31点（5件法・中間点は3点）であり、尺度の得点範囲からすれば極端に低い値とはいえない。しかし、分析対象者は、その属性にみられる通り、全体的にバレエに対して強く専心していると考えられる。このことからすれば、タイプVIは達成動機や自己肯定意識が相対的に低い集団と考えられ、このことが目標志向性に反映されているのではないかと推察される。また、タイプVIのみが、自己受容の得点がタイプIより有意に低く、さらに自己実現的態度の得点は全タイプの中で最も低い。これらを併せて考えると、一般的な自己意識の中の自己肯定性（平石，1990）は、バレエに取り組むという特定場面の自己意識にも反映し、さらにその高低が課題への取り組みにおける目標の持ち方に影響を及ぼしていると考えられる。

なお、タイプIの自己充實的達成動機と自己実現的態度の得点が、タイプVよりも有意に高い。タイプIとVは、遂行目標に関わる2つの志向性のどちらの得点も平均より高い集団である。一方、熟達志向はタイプIが平均より高く、タイプVは低い。このことから、熟達志向の高低には自己充實や自己実現に対する意識の違いが関係していると考えられる。

また、競争的達成動機の得点は、タイプIとVが、タイプIIとVIよりも有意に高かった。タイプIとVは先述の通り、遂行接近志向と遂行回避志向の得点が共に全体平均よりも高い。これに対しタイプIIとVIは共にこれらの得点が全体平均よりも低い。このことから、遂行接近志向と遂行回避志向の高さには、競争に対する関心を強く持

つ達成動機の強さが関係していると考えられる。また本結果は、遂行目標志向性が、他者との比較による自らの位置づけに強い関心を持つ目標傾向であることを、改めて支持しているといえる。

5. バレエの目標志向性と心理社会的スキルの関係

目標志向性別にバレエの心理社会的スキルを比較した結果、自律的行動スキルと忍耐・挑戦スキルの得点が、4つのタイプ（I, II, IV, VIII）とタイプVIとの間で有意差のあることが示された。タイプI, II, IVは遂行接近志向と遂行回避志向の高低がそれぞれ異なっているが、熟達志向が平均よりも高い点で共通している。またタイプVIIIは、熟達志向と遂行接近志向が平均より低く、遂行回避志向が平均よりも高い。これに対し、タイプVIは全ての目標志向性の得点が平均未満である。熟達目標志向性が高い人は、主体的に課題に取り組み、粘り強く、いつまでも挑戦を求めることが多い（外山，2011，p.179-180）とされている。したがって、熟達志向が高いタイプI, II, IVが、熟達志向の低いタイプVIよりも、自律的行動スキルと忍耐・挑戦スキルの得点が高いことは妥当な結果といえる。

一方、タイプVIIIはタイプIなどと異なり熟達志向が低いにもかかわらず、タイプVIよりも2つのスキル得点が有意に高い。タイプVIIIの特徴は遂行回避志向が高いことであるが、達成動機と自己肯定意識をみると、自己充實的達成動機と自己実現的態度の得点がタイプIなどと同水準であり、タイプVIよりも有意に高いことが分かる（表4）。このことをふまえると、タイプVIIIは他者と比べてできないと思われることの回避と共に、Elliot and McGregor（2001）が指摘する、これまでの自分の有能さを低下させないようにしたいという熟達回避目標を持ち、いわば自らの能力の地位保全に強く意識づけられているのではないかと考えられる。2つのスキルの項目内容からすれば、このような目標を満たすためにこれらのスキルが高いことは十分に考えられることである。

なお、この2つのスキルは、タイプIとVの間

でも有意差がみられ、タイプⅠの方が高い得点を示した。タイプⅠは全ての目標志向性が平均よりも高いのに対し、タイプⅤは熟達志向が平均未満で、遂行接近志向と遂行回避志向が平均以上の、いわば、遂行目標志向性が高いバレエ生徒である。2つのスキルの内容からすれば、タイプⅠにおいてこれらの得点が高いことの背景には、熟達目標志向性の高さが関係していると考えられる。一方、遂行目標志向性が高いタイプⅤにおいて得点が低い理由としては、能力の向上に対する関心のなさが考えられ、タイプⅤの他者より低位にならないための取り組みが、努力や頑張りからは掛離れた取り組みであることが示唆される。

一方、競争的成長スキルの得点は、タイプⅠがタイプⅡ、Ⅳ、Ⅵよりも有意に高く、また、タイプⅤもタイプⅡとⅥよりも有意に高いことが示された。これらのタイプに関して、遂行接近志向に着目すると、タイプⅠとⅤは平均以上であるのに対し、タイプⅡ、Ⅳ、Ⅵは平均未満である。したがって、タイプⅠとⅤの競争的成長スキルの高さは、他者よりも高位にありたいという遂行接近志向の高さが反映された結果といえる。

次に、積極的主張スキルは、タイプⅠがⅥよりも有意に高いことが示された。両者は対照的であり、タイプⅠは全ての目標志向性が平均以上であるのに対し、タイプⅥは全て平均未満である。自らのバレエに対する目標が明確であれば、その達成のためならば、自分の考えや感じていることを率直に表現し、成果の上がる取り組みを目指す予想される。一方、目標が明確でない場合は、自分の考えや姿勢を周囲に積極的に示すことは少なくなると考えられる。本結果からは、目標を明確に持つことが、バレエへの取り組みにおいて指導者や仲間との関わりを緊密にし、効果的な学習を可能にすることが示唆される。

最後に、協調スキルの得点はタイプⅠとタイプⅣおよびⅥとの間で有意差がみられ、目標志向性が全体的に高いタイプⅠが、仲間と深く関わりながら活動していることが示された。一方、タイプⅥは目標志向性が全体的に低いことから、他のタイプと比べれば相対的にバレエへの取り組み

は消極的であると考えられる。したがって、取り組みにおける仲間とのコミュニケーションも少なくなると推察される。

また、タイプⅣの協調スキルが低かったことについては、バレエへの取り組み姿勢が関係していると考えられる。すなわち、達成動機と自己肯定意識、また協調スキル以外の心理社会的スキルを総合的にみると、タイプⅣの自己充実的達成動機はタイプⅠとⅧに次いで高く、自己実現的態度は6タイプ中もっとも高い。また、自律的行動スキルがタイプⅠなどと共に高いことに加え、忍耐・挑戦スキルはタイプⅠと共にもっとも高い。しかし、その一方で、競争的成長スキルと積極的主張スキルの得点は相対的に低く、周囲に積極的に関わろうとする姿勢は強くないことが考えられる。以上のことから、タイプⅣはバレエへの取り組みに強い意欲を持ち熟達のかつ自律的に取り組んではいるがマイペースであることが示唆される。このようなマイペースの姿勢が仲間との協調の低さに繋がっていると推察される。

以上、バレエへの取り組みにおける目標志向性のタイプ別に、心理社会的スキルの高さを比較した。その結果、目標志向性の違いにより、心理社会的スキルの高さは内容ごとにそれぞれ異なることが示された。これにより、課題と能力に応じた適正な目標志向性に基づくバレエへの取り組みが、心理社会的スキルの獲得において重要であることが示されたといえる。特に、遂行目標志向性については、近年指摘されているように、動機づけに対してネガティブに影響するとは一概にいけないことを間接的に示す結果が本研究でもみられた。すなわち、全ての心理社会的スキルが高いタイプⅠは、熟達目標志向性が高いことと併せて、遂行目標志向性も高いバレエ生徒である。また、熟達目標志向性は低い、遂行目標志向性が高いタイプⅤは、競争的にはあるが仲間と共にバレエに関する自分の能力を高めようとする意識が高い。さらに、遂行目標志向性の内、遂行回避的な目標傾向が高いタイプⅣとタイプⅧは、自律的行動スキルや忍耐・挑戦スキルの獲得レベルが、遂行目標志向性の低いタイプⅥよりも高い

ことが示された。これらの結果は、どのような目標であってもそれを明確に持ち、その目標に基づく自らの行動に専心すれば、求める結果へと自らを導く、適応的な心理社会的スキルが醸成されることを示唆している。また、本研究により、目標志向性の3目標視点(Elliot and Harackiewicz, 1996)が、ダンスの1ジャンルであるバレエの教育的特性(高橋, 2008)を引き出す目標設定の枠組みとして、その適用の有用性が示されたと考えられる。

なお、熟達目標志向性と遂行目標志向性がいずれも高いタイプIにおいて、すべての心理社会的スキルの獲得レベルが高いことが示された。このことについては、すでに指摘した観客からの視線や注目に対する意識、そして仲間にも劣らないようにするあるいは自分だけ下手だと思われないようにするなどの意識が、タイプIの生徒では特に強く、そのことも多角的な目標志向を持つことに繋がり、結果として多くの心理社会的スキルを身につけるに至っているのではないかということが考えられる。

V まとめと今後の課題

本研究の目的は、バレエへの取り組みが、どのような心理社会的スキルの獲得に繋がるのか、また、その獲得レベルの高さと目標志向性との関係を検討することであった。全国のパレエ生徒165名のデータに基づき、心理社会的スキルの構成概念が因子分析により検討され、抽出された心理社会的スキルの高さがバレエの目標志向性のタイプ別に比較された。

分析の結果、5因子が抽出され、それらは運動やスポーツに取り組むことで獲得される心理社会的スキルと同様に捉えられるものであった。したがって、バレエへの取り組みによっても、心理社会的スキルが獲得されと考えられる。

また、バレエ生徒の目標志向性の特徴に応じて心理社会的スキルを比較した結果、熟達目標志向性と遂行目標志向性の両方が高い生徒は、全ての心理社会的スキルの獲得レベルが高いことが示さ

れた。一方、これらが共に低い生徒は心理社会的スキルの獲得レベルが全て低かった。さらに、遂行目標志向性の2側面の高さの違いがみられても、熟達目標志向性が高い場合には、自律的行動スキルと忍耐・挑戦スキルが高いことが示された。また、遂行目標志向性が高いことも、心理社会的スキルの獲得に関係することが示された。以上により、総括的には、バレエの心理社会的スキルの獲得状況は、バレエへの取り組みをどのような目標志向性に基づき行うのかということと関連していると考えられる。

本研究結果をふまえ、今後の検討課題としては次のことがあげられる。まず、初期の達成目標理論の重要な理論的背景である、自己の能力に対する認知をふまえた上で、バレエの目標志向性と心理社会的スキルの関係を検討することである。本研究では、Nicholls(1984)の能力と努力の分化・未分化の考え方や、Dweck(1986)の知能観をふまえたデータの収集と検討が行われていない。自己の能力の認知は、達成行動の質(適応的か不適応的か)に関係する重要な心理的変数(Roberts, 1992, pp.20-22)である。したがって、この点をふまえた心理社会的スキルの獲得レベルの検討が必要である。

次に、本研究では、有能さの定義と価の「2×2」の組み合わせによる目標モデル(Elliot and McGregor, 2001)において、理論上の枠組みとして示されているが十分な検討が行われていない、熟達回避目標を志向するバレエ生徒——自己充実の達成動機や自己実現の態度は高いが、熟達志向が低く、遂行回避的な目標傾向が高い(タイプVIII)——の存在が示唆された。したがって、熟達接近目標、熟達回避目標、遂行接近目標、及び遂行回避目標のそれぞれの志向性を持つバレエ生徒を特定し、その行動の特徴を検討する必要がある。

また、目標志向性を環境的要因としてとらえ動機づけ雰囲気視点に立った、バレエやその他のダンスへの取り組みを通じた心理社会的スキルの獲得と向上についての検討があげられる。課題達成が適正に行われ、また心理社会的スキルの獲得

や向上が促進されるバレエへの取り組みとはどのような取り組みなのかを、能力の認知、目標設定、そして動機づけ雰囲気 の 3 者の関係から明らかにすることが課題となる。そして、様々なジャンルのダンスへの取り組みについても同様の検討を行い、明らかになった知見をふまえたダンスに基づく教育的プログラムを設計し、その実践を通じたダンスへの取り組みによる心理社会的能力の醸成に関わる検討を行うことも重要な課題である。

謝辞

本研究は、第 1 著者が日本女子体育大学大学院スポーツ科学研究科に提出した修士論文（指導教員：佐々木万丈）について、データの一部に第 2 著者が新たに分析を加え、第 1 著者と第 2 著者によって改めてまとめられたものである。修士論文の提出にあたり、ご指導を頂いた日本女子体育大学の沢井史穂教授、古泉佳代准教授、及び中道直子准教授（現・東洋大学）に感謝を申し上げます。また、データの提供にご協力下さいましたバレエ教室の皆様にご心から感謝を申し上げます。

注

注 1) 標本の分類には、平均と標準偏差に基づく方法や多変量を扱うクラスター分析などが用いられる。しかし、例えば、平均 ± 0.5 標準偏差の得点群を除いてその高位群と低位群を抽出し特徴を比較しようと考えた場合、本研究では熟達志向の約 35%、遂行接近志向の約 24%、遂行回避志向の約 65% の標本の得点が平均 ± 0.5 標準偏差の範囲に含まれるため、これらの標本のデータは分析の対象外となってしまう。すなわち、データの多くでそこに含まれる情報が利用されないことになる。したがって、収集されたデータを可能な限り分析に用いるように考慮する必要があると考えられる。また後者のクラスター分析は、基準を多く用いた探索的な分類においてメリットがある（古谷野, 1988, p.165; 小田, 2007, pp.148-149）と言われている。この点、本研究の場合は基準となる指標が 3 つと少数であり、分類は容易に行うことができる。以上の理由から、各目標志向性の平均点を基準に、165 名全員のデータに基づいてバレエ生徒を分類することにした。

注 2) タイプ III 及び VII に該当するバレエ生徒がみられなかった理由については、本研究のデータからは明確な説明ができない。ただし、タイプ III は熟達志向

と遂行接近志向が高く、遂行回避志向が低いパターンである。このことから、仮に該当するのは、消極的な取り組み（下手だと思われぬように練習する、自分ができそうな振り付けだけ練習するなど）は示さず、他者よりも優れ、自己の向上も求める、言わば 8 タイプの中では最も高い自他の評価を持つとするあるいは得ようとするバレエ生徒ではないかと考えられる。それぞれの役割は与えられるものの、1 つの作品を複数のメンバーで表現し創り上げることが求められるバレエでは、このような突出しようとするタイプの生徒は現れにくいかもしれない。また、タイプ VII は熟達志向と遂行回避志向が低く、遂行接近志向のみが高い。これに該当する生徒には、自らの能力を他者との比較によって位置づけることに強い関心を持ち、うまくできそうな場合だけ自己の能力の高さをみせようとする特徴があると想定される。したがって、タイプ VII に関してもタイプ III と同様に、個の美しさと同時に集団による美しく協調性のある身体表現が求められるバレエでは見られないタイプと言えるのかもしれない。

文 献

- Adam, M. U., Brassington, G. S., Steiner, M., and Matheson, G. O. (2004) Psychological factors associated with performance-limiting injuries in professional ballet dancers. *Journal of Dance Medicine & Science*, 8(2): 43-46.
- 相川充 (2000) 人づきあいの技術. サイエンス社.
- Ames, C. and Archer, R. (1987) Mothers' beliefs about the role of ability and effort in school learning. *Journal of Educational Psychology*, 79(4): 409-414.
- Ames, C. and Archer, R. (1988) Achievement goals in the classroom: Students' learning strategies and motivation processes. *Journal of Educational Psychology*, 80(3): 260-267.
- Andrzejewski, C. E., Wilson, A. M., and Henry, D. J. (2013) Considering motivation, goals, and mastery orientation in dance technique. *Research in Dance Education*, 14(2): 162-175.
- 朝野熙彦・鈴木督久・小島隆矢 (2005) 入門 共分散構造分析の実際. 講談社サイエンティフィク.
- 蘆田ひろみ (2004) クラシックバレエダンサーに起こりやすい愁訴とその対策. *臨床スポーツ医学*, 21 (2): 105-110.
- 蘆田ひろみ (2006) バレエダンサーのスポーツ障害・外傷とヘルスケア. *治療*, 88 (6): 1731-1735.
- Byhring, S. and Bo, K. (2002) Musculoskeletal injuries in the Norwegian National Ballet: a prospective cohort study. *Scandinavian Journal of Medicine and Science in Sports*, 12(6): 365-370.
- Danish, S. J. (2002) SUPER (Sports United to Promote

- Education and Recreation) program: Leader Manual and Student Activity Book (3rd ed.). Life Skills Center, Virginia Commonwealth University.
- Danish, S.J., Forneris, T., and Wallace, I. (2005) Sport-based life skills programming in the schools. *Journal of Applied School Psychology*, 21(2): 41-62.
- de Bruin, A. P., Bakker, F. C., and Oudejans, R. R. D. (2009) Achievement goal theory and disordered eating: Relationships of disordered eating with goal orientations and motivational climate in female gymnasts and dancers. *Psychology of Sport and Exercise*, 10(1): 72-79.
- Dweck, C. S. (1986) Motivational processes affecting learning. *American Psychologist*, 41(10): 1041-1048.
- Elliot, A. J. and Harackiewicz, J. M. (1996) Approach an avoidance achievement goals and intrinsic motivation: A mediational analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70(3): 461-475.
- Elliot, A. J. and McGregor, H. A. (2001) A 2×2 achievement goal framework. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80(3): 501-519.
- Forneris, T., Conley, K. A., Danish, S. J., and Stoller, L. M. (2014) Teaching Life Skills Through Sport. Community-Based Programs to Enhance Adolescent Development. In: Van Raalte, J. L. and Brewer, B. W. (eds.) *Exploring Sport and Exercise Psychology Third Edition*. American Psychological association. pp.261-276.
- Fraser-Thomas, J. and Cote, J. (2009) Understanding adolescents' positive and negative developmental experiences in sport. *The Sport Psychologist*, 23(1): 3-23.
- Goudas, M., Dermizaki, I., Leondari, A., and Danish, S. (2006) The effectiveness of teaching a life skills program in a physical education context. *European Journal of Psychology of Education*, 21(4): 429-438.
- Hanrahan, S. J., Pedro, R. C., and Cerin, E. (2009) Structured self-reflection as a tool to enhance perceived performance and maintain effort in adult recreational salsa dancers. *The Sport Psychologist*, 23(2): 151-169.
- 速水敏彦・伊藤篤・吉崎一人 (1989) 中学生の達成目標傾向. 名古屋大学教育学部紀要, 36 : 55-72.
- 平井博志・木内敦司・中村友浩・浦井良太郎 (2012) 大学期における課外活動の種類とライフスキルの関係. *大学体育学*, 9 (1) : 117-125.
- 平石賢二 (1990) 青年期における自己意識の発達に関する研究 (I) —自己肯定性次元と自己安定性次元の検討. 名古屋大学教育学部紀要, 37 : 217-234.
- 平石賢二 (1993) 青年期における自己意識の発達に関する研究 (II) —重要な他者からの評価との関連. 名古屋大学教育学部紀要, 40 : 99-125.
- 堀野緑 (1987) 達成動機の構成因子の分析—達成動機の概念の再検討. *教育心理学研究*, 35 (2) : 148-154.
- 堀野緑・森和代 (1991) 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因. *教育心理学研究*, 39 (3) : 308-315.
- 伊藤豊彦 (2013) 動機づけ理論. 西田保編, スポーツモチベーション. 大修館書店, pp.24-38.
- Katz-Zichrony, S. (2015) The experience of dance as a condition for fostering social, traditional and cultural skills among early childhood. *STUDIA UNIVERSITATIS MOLDAVIAE*, nr.5(85): 104-107.
- 古谷野亘 (1988) 数学が苦手な人のための多変量解析ガイド. 川島書店.
- Lobo, Y.B. and Winsler, A. (2006) The effect of a creative dance and movement program on the social competence of head start preschoolers. *Social Development*, 15(3): 501-518.
- Masadis, G., Filippou, F., Derri, V., Mavridis, G., and Rokka, S. (2019) Traditional dance as a means of teaching social skills to elementary school students. *International Journal of Instruction*, 12(1): 511-520.
- Miller, L. A., McIntire, S. A., and Lovler, R. L. (2011) *Foundations of psychological testing: A practical approach*. 3rd edition. SAGE Publication.
- 村山航 (2003) 達成目標理論の変遷と展望—「緩い統合」という視座からのアプローチ—. *心理学評論*, 46 (4) : 564-583.
- Nicholls, J.G. (1984) Achievement motivation: Conceptions of ability, subjective experience, task choice, and performance. *Psychological Review*, 91(3): 328-346.
- Noh, Y.E., Morris, T., and Andersen, M.B. (2007) Psychological intervention programs for reduction of injury in ballet dancer. *Research in Sports Medicine*, 15(1): 13-32.
- 小田利勝 (2007) ウルトラビギナーのためのSPSSによる統計解析入門. プレアデス出版.
- Petitpas, A. (2001) National Football Foundation's Play It Smart program. 10th World Congress of Sport Psychology: Program and Proceedings, Vol.2, pp.316-317.
- Roberts, G.C. (1992) Motivation in sport and exercise. *Human Kinetics*.
- 櫻井茂男 (2009) 自ら学ぶ意欲の心理学. 有斐閣.
- 澤田美砂子・杉山哲司 (2011) 舞踊における動機づけの研究—目標志向性との関係—. 日本女子大学紀要・家政学部, 58 : 25-30.
- 渋谷崇行・西田保・佐々木万丈・北村勝朗・磯貝浩久 (2018) 高校運動部活動における心理社会的スキルの日常生活への般化: 3 時点での交差遅れ効果モデルによる検討. *体育学研究*, 63 (2) : 563-581.
- 杉山佳生 (2004) スポーツとライフスキル. 日本スポーツ心理学会編, 最新スポーツ心理学その軌跡と展望.

- 大修館書店, pp.69-78.
- 杉山佳生・渋谷崇行・西田保・伊藤豊彦・佐々木万丈・磯貝浩久 (2010) 体育授業における心理社会的スキルとライフスキルを測定する尺度の作成. 健康科学, 32 : 77-84.
- 高橋和子 (2008) なぜいま「ダンス必修化」なのか. 体育科教育, 56 (3) : 20-23.
- 高波幸代 (2012) 分散分析. 平井明代編著, 教育・心理系研究のためのデータ分析入門. 東京書籍.
- 高山昌子 (2014) ライフスキル獲得を目指した授業実践—創作レクリエーションダンスを通しての学生の変化—. 太成学院大学紀要, 16 (33) : 73-77.
- 外山美樹 (2011) 行動を起こし, 持続する力 モチベーションの心理学. 新曜社.
- 上野耕平 (2001) 運動部活動における生徒のライフスキル獲得とコミットメントの関係. 日本スポーツ教育学会第20回国際大会論集, 155-160.
- 上野耕平・中込四郎 (1998) 運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究. 体育学研究, 43 (1) : 33-42.
- 海野敏・小山久美 (2017) 日本のバレエ教育の実態および課題—第2回『バレエ教育に関する全国調査』に基づく考察—. 舞踊学, 2017 (40) : 14-25.
- 海野敏・高橋あゆみ・小山久美 (2012) 日本のバレエ教育機関における教師の現状と課題—『バレエ教育に関する全国調査』に基づく考察—. 舞踊学, 2012 (35) : 13-22.
- 鶴沼奈美・布施裕二・佐藤光源 (1994) やせ願望から拒食・ヒステリー・強迫症状を呈し, バレエを通して body image の変化をみた1症例. 心身医学, 34 (5) : 431-432.
- WHO 編 (1997) WHO ライフスキル教育プログラム. 大修館書店.
- 山本浩二・中井聖 (2012) 高等学校におけるダンス授業の効果の検討. 近畿医療福祉大学紀要, 13 (2) : 49-56.
- 横尾直樹・山本和良・中村潤一郎・本田淳・上杉昌章・斎藤知行 (2003) クラシックバレエダンサーの腰痛—アンケート調査によるプロとアマチュアの比較—. 日本腰痛会誌, 9 (1) : 111-116.

(2020年1月7日受付)
(2020年5月27日受理)

Advance Publication by J-STAGE
Published online 2020/6/4